

1

【出題の意図】

問題文は、長谷川宏『高校生のための哲学入門』（ちくま新書、2007年）の第2章「人と交わる」の一部分を抜き出し改変を行ったものである。

著者は1940年生まれで『精神現象学』他ヘーゲルの著書の翻訳者として知られている。「高度経済成長のもと産学協同の体制が着々と作りあげられる」なかで現実の政治体制や社会状況から自立した知と思考を求めて大学の研究体制を出た著者は小さな塾を開き様々な人との学びの場を開設した。そこでの課題は抽象的・観念的な思考を日常の暮らしに近づけることであった。「意思の疎通や相互理解のむずかしさは、反面、わたしたちの生きる日常生活のゆたかさと複雑さのあかし」であり、人間の歴史とは、その「むずかしさ」のなかで関係を深め互いに理解し結びつくいとなみなのだと著者は述べる。

本書は、そんな著者が、自らの青年期の足跡を現代の若い世代に向けて語りながら知と思考のもつ力とは何かを哲学的に探究しようとしたものである。自己というものについて論じた第1章につづく第2章では「人となり」への関心を糸口として畳みかけるように「人との交わり」について論を展開してゆく。そして、対等な関係とは差別や上下関係への「強力な抵抗体」になりうるとの結論を導いていく。

本問題では、まず「対等」と「平等」というキーワードを手がかりに文章の論理構成を把握する力を問うた。受験生には、著者が述べる「対等」と「平等」の意味の相違を認識し、人となりへの関心を通じた人との交わりが社会的規制に縛られない関係を切りひらくとする著者の主張を理解することを求めている（問1）。次に、著者の主張を対象化し、それとかわらせながら自ら考察を展開する力を問うた。問題文中においてすでに「ことばの共同性」についてはわかりやすく示されており、また受験生にとっても身近な論点であると考えられることから、その可能性と課題について著者の論を拡張しながら自由に論じてもらうこととした。様々な例を挙げて自由に論じうる問いであるが、あくまでも問題文の内容を踏まえ、賛同するにしても異論を述べるにしても、著者の主張と関係づけて自身の考えを述べることを求めた。（問2）。

【出題の意図】

問題文は『教育効果を可視化する学習科学』（ジョン・ハッティ、グレゴリー・イエーツ 著、原田信之 訳者代表）からの抜粋である。本書は、学習に関するさまざまな研究のメタ分析をもとに何が効果的な学習に作用するのかを論じたものである。

課題文 A、B は、学習におけるデジタル機器やインターネットの利用について述べた 2 つの章からの抜粋であり、それぞれ異なる意見が述べられている。課題文 A は、現代の生徒がデジタル機器の活用 に 長けていることを肯定的に捉える見方であり、そのような生徒に適した新たな教育実践や教育制度が必要となる、という意見が述べられている。一方、課題文 B ではインターネットを用いた情報収集は深い思考を阻害するのではないか、という危惧が述べられている。本問題では、これらの意見を参考にしながら、インターネットやデジタル機器を学習や教育に利用することの利点と問題点について整理することを求めている（問 1）。さらに、問 2 では問 1 で整理したことを踏まえて、これからの学習や教育のあり方について自らの考えを論述することを求めた。

学習場面でのインターネットやデジタル機器の活用はこの数年間で急速に拡大しており、また活用が推奨されてもいる。課題文 A、B に挙げられている点も含め、受験生は肯定的意見、否定的意見の両方を見聞きしていると思われる。そのような意見を無批判に受け入れるのではなく、学習や教育の本質的な課題を踏まえて検討し、議論できる学生を受け入れたいというのが、本問題の意図である。なお、原文には諸研究の知見を踏まえて著者自身の見解を述べた部分が続くが、受験生が自由に論述できるようこの部分は割愛した。

この問題を通して受験生に問いたい能力は以下の 2 つである。1 つ目は、文章に含まれる論点を正しく理解し、それを適切にまとめる能力である。2 つ目はその論点を適切に用いた論理的思考力である。大問 1 が資料を適切に活用した論述能力を対象とするのに対し、大問 2（本問）では、比較的自由な論述能力を対象とした。